園長のまなざし

第７回

緊張の静

前原　寛

子どもは元気に動き回っていて落ち着かないもの。そんな先入観をもっていると、あっさり覆されます。

小さな木片を積み上げたタワーの中に、五歳児の男の子が入っています。

そのタワーの細いこと！

男の子が少しでも身じろぎしたら、たちまち崩れてしまいそう。もう顔しか見えなくなっているのに、周りの五歳児たちはさらに木片を乗せて、タワーを高くしようとしています。小さな木片でタワーを組み上げるのにどれほどの時間がかかったでしょう。しかもタワー自体、垂直ではなく、微妙にウェーブがかかっています。触らなくても崩れそうな気がします。

大人だったら効率よく、真っ直ぐに組むのでしょうが、子どもたちは少しズレていくのを修正しながら、バランスを崩さずに組んでいます。

その間、中の男の子は微動だにしない姿勢を続けています。にもかかわらず、表情は余裕の笑顔。木片を

乗せる子どもたちは、ニコニコしながらも真剣そのもの。木片の置き方を間違えたら、タワーはおしまいですから。

いつもは活発に遊んでいる五歳児たち。その子たちが、自ら選んだ遊びの中で、「静」の情景をつくり出しています。特にタワーの中の男の子は、五歳児の中で最もわんぱくな子です。

これほどの静の姿は、大人が押しつけてできることではありません。子ども自身の力があふれ出てくるとき、それは可能になります。

「このごろは、じっとしていられない子どもが多い。大人が厳しくしつけないからだ」そう言う大人をあざ笑うかのように、体をいっぱいに使って遊ぶ子どもだからこそ、自らを静に保つことができるのです。そのとき、単に静かにおとなしくしている姿ではなく、全身に意識をいき渡らせた「緊張の静」が生まれます。

（鹿児島国際大学・元安良保育園園長）